

会員のひろば

和して同ぜず ～私とセンター事業団

斉藤 映美

(岩手県/センター事業団東北事業本部・盛岡事業所)

頃は3月下旬の年度末でありまして、何かと事業所内もバタバタしている矢先、協同総研の佐藤さんから「ジッセンカ、(実践家?実戦家?)」として、原稿を書いてほしいとお電話をいただきました。労協の現場に常時携わる者として何がきついかといえば、すばらしい理念・お題目を体現しなければならないことです。組合員とともに実態を作っていかなければ、提携先に対して嘘をつくことになるからです。中学生の頃、学習塾に通っていたことがありましたが、先生が「決して批評家にはなるなよ」と言っていました。全くだと思えます。どんなにつらくても口先だけでなく、有言実行をし続けていきたいと思っています。

昨年度から私自身こちらの会員になりましたが、それまでの協同総研に対してのイメージは「本ばっか読んでないで、現場にはいってみろ」というものでありました。丸2年労協で働いた時点で、客観的に協同というものをみて広く伝えていくことの重要性に気がきました。ちょうど去年の春くらいだったと思います。なんでもプラス思考するくせをつけていましたから。自分自身精一杯やるべきことをやったという充実感もありました。それから1年、多業種・多現場である盛岡事業所の活動と、それから見えてきたセンター事業

団についての私感を書かせていただきたいと思います。

1年目は川久保病院現場の清掃から始まり、運良く売店運営の依頼を受け立ち上げ、その半月後には盛岡赤十字病院現場の立ち上げということで、2年目も目標がかなり鮮明というか息つく暇もありませんでした。今にして思えば、人間がむしゃらに前進することも必要であるということと同時に、《自分の世界の協同》だったなということです。(そういうのは協同と言わない!)

赤十字病院現場は常時、かなりの人数の応援に恵まれていました。それから当然、60人近い組合員がいたからこそ日々よい仕事が遂行できたわけです。自分の努力は1/60にすぎなかったはずなのですが、それを忘れてしまっていました。なぜそのようなことを考えるようになったかといえば、(あまり書きたくないけど)去年の2月の東北ブロック会議の場で、「このままでは、皆がくさってしまう」などとしゃべってしまったからです。当時同世代の事務局員が何人もおりまして、それこそ仲良しこよしというか、朝から晩まで一緒にいることが多く、真面目な話からくだらない話までなんでもしておりました。でもある日ふと「自分ばかりが仕切ってしまったな」ということに気付いたのです。みんな同調しているけど、ほんとに心の底からそうなのかと。それが前述の発言へと繋がったわけですが、たとえ表に出ない人でもどれだけ赤十字現場の業務を支えているのか、精神的な面まで含めて考えようとしたことのなかった自分がいることに気がきました。

大学時代の部活動の事を振り返って考えてみても、先輩や後輩との関係作りはうまくいっても、一番肝心な同期の女子部員2人をうまくひっぱっていくことのできなかった経験があり、自分自身あれから全然成長していないのだと久々にすさまじい自己嫌悪に陥りました。

その後は少し自分を抑えて(嘘だろうという声が聞こえてきそうだが)、とりあえず自分の思いどおりに物事を運ぶのはやめて、盛岡事業所の1/130の力なのだという認識を持つようと思いまし

た。これはなかなかストレスで、いかに今までそういう訓練をしてこなかったかを実感しています。いくら「労協は自らが主体的に関わり…」といっても、自分だけが主人公になったつもりでは、協同組合ではないということです。これは盛岡事業所が多業種・多現場であり、複数の事務局員（しかも同世代）体制だったからこそ感じえたことだと思います。ちょうど長崎で総会・総代会があった頃で、発言の機会が与えられたときに、「赤十字現場も2年目に入ったので、既存の盛岡の現場と結んで地域に根ざしていきたい」などとしゃべって、決意を新たにしました記憶があります。

ところが、そうは問屋がおろさない訳です。川久保病院の清掃、食器洗浄、売店と盛岡赤十字病院の看護助手業務（8部署）を同時に見ていくことになったのですが、必ずどこかで欠員が出て、盆も正月もなく、はたまたゴールデンウィークもなく働きつづけるはめになりました。「生身の人間の集まりなんだから、当たり前だ」と組合員で豪語する人もいるし、そうは言っても私も生身のかawaii乙女のはずが、過酷な労働のおかげで強靱な肉体に豹変しておりました。でもとにかく時間的にも精神的にも余裕がありません。それなのに本部から送られてくるのは、高齢協ネタの今日のニュースばかり。東京の高齢協設立の前くらいから、本部の推進する運動と、現在自分の置かれている状況（病院側が求める高度な事業運営能力、100%近い原価率など）とに、到底埋め合わせることができないようなギャップを感じました。なんでもプラス思考に捉えようとしてきた自分の目の前に立ちはだかる、大きな壁です。それに追い打ちをかけるように、9月の看護助手会議では、ヘルパー講座の企画案をもの見事に打ち砕かれ、それまで組合員と培ってきたと思ひ込んでいた信頼関係までもが危うくなってきました。

それを機会に、今まで自分は本当の意味での対話をしてきたのかということに疑問を持ちました。ただただ、本部の方針に従い、議論で組合員をねじ伏せていたに過ぎなかったのではないかと、その弊害、つけが一气に出たのではないかと

ことです。2月のブロック会議で事務局員に対してしたことを、組合員に対してもまだやっていた。これを機に暗闇のトンネルに入りました。10月末の全国代表者会議で「私の悩みも高度化・総合化・複合化してきました」と発言したら、皆さん相当に受けて下さいましたが、現実問題悩んでいたことと同時に、それだけ各事業所が高度化・総合化・複合化してきた事業を日々こなしているのだ（だから軽々しく使うな）ということも暗に言ったつもりです。

その後の約半年間は、職場会議の内容も現場で起こる日頃の問題点解決のみに焦点をあててきました。事務局員がそのような状態では、本部と事業所のパイプ役にならないだろうといわれても、そのような事が出来るような精神状態ではありませんでした。しかし、そのようなことをずっとやっていると、最近目指すべきものは何なのかが分からなくなってきました。

先日、赤十字病院の担当の職員の方と話す機会があったのですが、「組合員がいきいきと誇りを持って働けるように」と言われて、久しぶりにハッとなりました。やはり目の前の問題を改善するにしても、少し離れたところに目指すべきものがないと生き生きと出来ないのではないかとということです。かといってそれが即高齢協だとは思いませんが、労協自体、これだけ他人のことを考えようとする組織もないだろうということを東北の協同集会の運営に携わった時に感じています。しんどいけれどもまだまだ捨てたもんじゃないというのが、今の率直な感想です。今後のシナリオをどう描くか、アドバイスのある方、どうかお願いいたします。